

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2017.5

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

<アワプラジオとは> 認定NPO法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

編集長：阿部浩一 発行：インターネットラジオ アワプラジオ 105-0013 東京都港区浜松町 2-2-15 浜松町ダイヤビル 2F うんすい総研気付
info@awapuradio.com TEL:03-6856-0722 FAX:03-6856-0723 http://awapuradio.com/

『Abe's VIEW』 Vol. 29 「“すばらしい話” からもたらされる良からぬ副産物」



編集長近影（笑）。 写真：おおぼのりこ

世の中にはそのこと自体はすばらしい話や発想であっても、良からぬ考えを持つ人々などに都合よく解釈され、利用されるなどということがあります。

たとえば日本が歴史上、外国で善い行いをした、何かに尽力したなどというエピソード。それ自体は尊いことで長く語り継がれるべきすばらしいことですが、そのことで日本が過去に犯した過ちまで無かったことになるわけではありません。

しかしながら、反省やそこからの前向きな議論に対して、いわゆる“自虐史観”などとレッテル貼りをして批判したがる人々ほど、自分たちの思想信条を脅かす都合の悪いことに

は耳をふさいで、そういった善行エピソードばかりをこのほか持ち上げて利用しようとしたりします。

また、私は非営利組織（NPO）のファンドレイジング（寄付集めなどの資金調達や広報）にかかわる仕事をしていますが、NPO がそのミッション実現のため、財源の多様化の一つとしてファンドレイジングに力を入れることはよいのですが、行政が自分たちの計画の中でNPOの自助努力を推進することには違和感があります。

NPO 自身が営業努力をすることは良いことですし、むしろそれをやらないことを私は悪だとさえ思います。だからといって、行政がNPOの努力に依存するとしたら職務怠慢です。

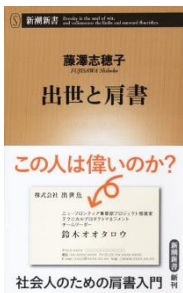
たとえば人々の命や安全にかかわること。あるいは教育にかかわることなんかは特に、本来は行政が中心となって担うべきことです。最近では大学がお金に困って寄付集めやクラウドファンディングに力を入れている事例を目にします。学校が財源確保のため努力や工夫をすることは立派ですが、それで運営されていくことが当たり前になってはいけません。

「〇〇大学はクラウドファンディングで××円集める力がある、すばらしい。だから他もがんばれよ」となって、行政が何もしなくていいことの免罪符にならないように。そのこと自体はすばらしい話や発想であっても、私たちはそれによってもたらされる良からぬ副産物を、注意深く見る必要があります。（阿部浩一）

『GREEN BOOKS』

～本の紹介～

出世と肩書 (2017年3月) 藤澤志穂子 著 新潮社 (新書)・821円



前々から日本独特の組織の肩書のあり方については気になっていた。トップであるはずの社長や代表などといった人々の上に会長、会長代行、副会長、相談役、最高顧問、顧問などがいること。また代表代行と副代表ってどう違ってどっちが偉いのかとか、副事務局長がいて事務局次長がいるって何が違うのか等々。

本書のことを知ったとき、著者が女性であるということもあって、きっとそんな滑稽な男性中心の日本社会を斬るような溜飲の下がる内容なのだろうと期待して手に取った。ところが読み進めていくうちに、その期待は良い意味で裏切られることとなる。

長年、産経新聞の記者として多くの官僚、政治家、企業トップたちと接し、取材を重ねてきた著者による本書は、功成り名遂げた人々、あるいはそこから失脚した人々への愛情が感じられてとても読み応えがある。産経新聞の紙面の傾向からか、旧民主党政権のことに触れたくだけは辛口だとは感じつつも、政界に官界、財界。ある意味多様で、微妙な利害関係を調整する装置として、傍目には複雑怪奇な序列と肩書の存在する理由が本書を読めば伝わってくる。

最近よくみられる横文字の肩書。本書の帯に「ニューフロンティア事業部プロジェクト推進室テクニカルプロダクトマネジメントチームリーダー」という肩書を指し、「この人は偉いのか？」とあるが、今やそんな例も珍しくない。また事務次官は次官と言っても官僚のトップである理由は何かなど、教養の一つとして知っておきたい点もよくわかる一冊だ。（阿部浩一）



良い意味で期待を裏切られた、ということがたまにある。イスタンブールへの旅はまさにそんな旅だった。

初めてのイスラム教国ということもあり、出発前はだいぶ神経質になっていたのだが、結果的には全くの徒労だった。待ち合わせ場所にきた現地女性ガイドは、顔を覆うヒジャブも持たず、流行の髪型にノースリーブ姿で我々を迎えてくれた。

案内されたブルーモスクは、名の通り青く丸い屋根と6本の塔が美しく対比し、その内部は、厳粛な雰囲気さを漂わせていた。欧州あたりの教会とは違い、どちらかといえば空気はやや重く、燭台の灯りを通して人々の願いや魂を色濃く感じる。その反面、建築物としてのモスクは、繊細な模様の描かれたタイルで彩られ、また形がドーム状ということもあり、訪れる人を柔らかく包み込むようなおおらかさと華やかさを携えていた。

明るいガイドと別れ、散歩がてら市場を訪れた。「よりどりみどり五月みどり！」「そんなの関係ねえ！」という声に振り向くと、若者が土産物店の呼び込みをしているところだった。トルコの人は親日家、とは聞いていたが、中東の地で聞く日本語のギャグには驚いた。しかも微妙に古い。親日は喜ばしいことだが、親愛の表現手段はほかになかったのか。

トルコ石のピアスを買って、ガラタ橋へ向かった。私はここでどうしても食べたいものがあった。その名も「サバサンド」。焼きたてのサバを生玉ネギと一緒にフランスパンに挟み、たっぷりのレモン汁を掛けて食べる、ただそれだけ。日本人には馴染みのない、焼き魚とパンの取り合わせ。だが意外にも、肉厚で香ばしいサバとパンが絶妙にマッチしている。バターの代わりに、パンに染みたサバの脂が甘くジューシーで、醤油代わりにレモンがまた泣かせる。美味しいという噂に懐疑的だった私を、イスタンブールはまたしても裏切ったのだ。だがたまにはこんな旅も悪くないのではないだろうか。（浅香友里）

投稿コーナー

恩師や仲間達に誇れるような人生を送りたい

吹奏楽部時代の恩師の還暦祝い演奏会に参加して



高校の3年間、吹奏楽部に所属していました。100名を超える部員数で、私が入学する前年にマーチングの全国大会に出場したこともあり、土日夏休みもほぼ毎日練習をしていました。しかしながら私が在籍した3年間では、全国大会に出場することができませんでした。

それから20年が経過。その間は吹奏楽から離れていましたが、「先生の還暦のお祝いに演奏会を開こう」と、同級生が中心になって、実行委員会を立ち上げてくれました。私はパーカッション（打楽器）担当でしたが、手元に楽器もありません。参加を迷っていましたが、同級生の「1人でも多くの同期生と舞台に上がれるとうれしい」という言葉に、演奏メンバーとして参加することを決めました。

2016年9月から、月2回のペースで練習が行われました。わかっていたことですが、高校の時のように手首が動かずもどかしい思いをしました。ただ本番が終わってから後悔しないように、全体練習の他にも、個人練習などにも取り組みました。そして、迎えた2017年2月の本番。満席のお客様（編集長の阿部さんもいらっしゃいました！）と共に、先生の還暦を盛大にお祝いすることができました。

演奏会の後の謝恩会で、先生が仰ったことがあります。「現役の時に全国大会に行ったかどうかよりも、その後のあなた達が、どのような人生を歩んでいるかが知りたい。今も当時の仲間と交流が続いているということのほうが、価値がある」。……私は、「吹奏楽」というよりも、「みんなと何かを創り上げる」という体験をさせていただいていたのです。

いま改めて、高校3年間という多感な時期に素晴らしい恩師、厳しい先輩、優秀な後輩、“濃い”同級生と過ごせた私は幸せ者だと気付くことができ、支えてくれた両親に感謝したのでした。そして、「恩師や仲間達に誇れるように、これからの人生をより楽しみながら充実させていこう」と思いを新たにしました。（中里美喜）

※今月はHello! Movie（映画の紹介）はお休みです。